長野県 PTA 母親文庫における「自立のための読書」の位置づけ：「創作グループ」の事例から

山﨑　沙織（東京大学事務部）
nekonoko1199@yahoo.co.jp

1　はじめに

1-1　長野県 PTA 母親文庫と「創作グループ」

長野県 PTA 母親文庫は，長野県において 1950 年から 2014 年まで続いた文庫活動で，県立図書館の本を会員の母親達が回覧することを活動の基礎とする。今日「母親文庫」という言葉は，母親による子供への読書推進（読み聞かせ等）を想起させがち [1]であり，長野県 PTA 母親文庫も 1960 年代末からはそうした活動に力点を置いている。しかし，創設から 1950 年代，60 年代の母親文庫の活動の主眼はあくまで母親自身の読書にあった。参加者の多くは農家の主婦であり，自分達を「（戦後の新教育を受けて育つ）子供よりも時代に遅れがちな存在」と見なして子供の読書活動推進より自分達が「読書」して時代についていけるようになることに活動の主眼を置いていた [2]。本論が主題とする「創作グループ」は，母親文庫における母親自身の読書への志向を体現する活動のひとつである [3]。

創作グループは 1963 年 12 月，読後感を語り合ったり文の作り方を習ったりする場が欲しいという会員の声を受け，長野県 PTA 母親文庫の所属団体である上田市 PTA 母親文庫の中に誕生した。メンバーとなったのは当時 30 代～40 代の大正生まれの母親であり [4]，“私たちの青春は／戦争の中にあった／そして／戦後は，食べることと育児に追われてきた” [5][p.46]とうたう人々であった。「創作グループ」は設立から 8 年後の 1971 年に母親文庫からの独立を余儀なくされるが，2000 年代に至るまで読書会と文芸創作，合評を中心に 30 人程度で活動を続け，例会数は 400 回以上，発行した文集は 46 冊に及んだ。また，メンバーによる戦争体験や自分史等の自費出版も多く，これらは“名もない私のような主婦” [6][p78]を自称する人々による貴重な歴史資料となっている。

1-2　本論の問い

本論はこの創作グループの活動を分析し，以下の 2 つの問い，①グループの助言者の図書館員の主張の中で助言活動とグループの参加者の「自立」の援助はどう結びついていたか。②グループが最終的に文庫から独立した際「母親」であることと「自立のための読書」を行うことはどんな関係にあったか。に回答を与えることを目指す。

2　本論の視座と先行研究の検討

本論が「創作グループ」に着目する理由は 2 点あり，各理由は前掲の問い①，②と結びつく。

1 点目は，創作グループに助言者として関わり続け，公共図書館の社会教育機能の重要性を主張して [7]読書会等での助言を積極的に行った図書館員（平野勝重）の論の分析により，第 2 次世界大戦後の公共図書館が戦中に青春を過ごさざるを得なかった女性達の生涯学習を支えた方法を明らかにできるためだ。文章の解釈を講義したり読むべき本を推薦したりすること以上に，被助言者が読書と文芸創作を通した“自立への旅立ち”ができるよう腐心する [8]平野の助言実践 [9]は，資料提供中心の「市民の図書館」を目指す時代にありながら，「市民の図書館」とも戦中の「教導・教化」とも異なるものに見える。だが，先行研究は平野の助言活動と被助言者の自立の支援の結びつき方の詳細を明らかにしない [10]。本論はこの結びつき方を問い，戦後公共図書館が果たした役割の重層性を解明すると共に，社会教育機関としての公共図書館を考える際の一助を得たい。

理由の 2 点目は，母親自身の読書への志向を極めた「創作グループ」の「自立のための読書」の

実践と，母親自身の読書から母親による子供への読書推進へと活動志向を転換させていった長野県 PTA 母親文庫全体の実践を対照させることで，長野県 PTA 母親文庫における「母親であること」と「読書活動を行うこと」の関係性（の変化）をより明確に捉えられるためだ。創作グループを含め，母親文庫での母親自身の読書活動に焦点化した研究はこれまでも行われてきている [11]が，先行研究は，それらの読書実践がどのような立場や能力（例えば，「時代に遅れた」存在であることや，「子供の理解者」であること等）とどのように結びつくことで正当化／非正当化されてきたかを十分には検討していない。そこで本論は，長野県 PTA 母親文庫からの独立を余儀なくされた時期の創作グループの実践と，同時期に母親らしい読書活動への志向を強めた長野県 PTA 母親文庫本体の実践を比較し，母親文庫における「母親」であることと「自立のための読書」を行うこととの関係性の変化を問おうと試みる。なお，この試みにあたっては，創作グループの母体である上田市 PTA 母親文庫の活動記録のみならず，県内の別地域の母親文庫（母親らしい活動に特に力を入れた諏訪市 PTA 母親文庫）の活動記録も適宜参照する。

3　分析データと分析の方法

これらを問うにあたり，本論は平野の論文，著作と平野へのインタビュー（2015 年 10 月 3 日上田市情報プラザにおいて実施）データ，創作グループの文集（1965 年～2007 年），上田市 PTA 母親文庫の文集（1961 年～2003 年），及び諏訪市 PTA 母親文庫の文集（1962 年～続刊）を分析する。分析においては，長野県 PTA 母親文庫の関係者が自分達の読書実践を語る際，自分をどのような立場や能力をもつ者とみなし，また，その位置や能力と読書実践をどのように関係づけているかに着目する。

4　自立の援助としての読書指導

4-1　より広い視野をもたらすための助言

平野は 1932 年上田市に生まれ，文部省の図書館職員養成所を経て防衛大学図書館に勤務した後，親族からの要望を受けて帰郷し，1961 年 1 月に上田市立図書館に就職した。そこで母親文庫会員の本への熱意に圧倒された平野は会員達の要望を受け，読書や文章作成の助言を行うようになる。当時の図書館界は，戦中の思想統制への反省から図書館員が読書会等で助言を行うことについて消極的だった [12]が，平野は，“助言とはいうまでもなく，読書による理解が，より深いものとなるために協力をすることであり，指導や教化ではない” [8][p20]として助言を続けた。

平野が自身の助言を指導・教化と区別し得たのは，助言の目的を “自己の体験を超えて，他者を理解することがなかなかできない” [8][p.23]人々（母親文庫の会員達）に“想像力によって他者の体験を自分の体験としていく” [8] [p.23-24]契機を与えることに置いていたためである。同じ文章で，平野は読書会での具体的な助言例を挙げつつ，“私の解釈は正しくないかもしれない。彼女たちの感想のとおりでよいのかもしれなかった。” [8][p.23]とも述べる。この事例において，助言者による小説の解釈の提示が行われるべき理由は，解釈の「正しさ」にでなく，“彼女たち”とは異なる平野の解釈が自己の経験に埋没しがちな母親文庫会員達の視野を広げるうることに求められているのである。

4-2　生活の再認識としての読むこと・書くこと

1963 年に創作グループが発足すると，平野はその助言者となった。創作グループは読むことのみならず書くことも活動の中心に据えているが平野にとっては，読むことも書くことも，自己の経験に埋没しがちな母親達に“生活の再認識” [8][p.43]の契機を与えるという意味で分かちがたく結びつく活動だった。

創作グループにおいて平野は創作作品の合評活動にも力を注ぎ，メンバーが互いの助言者となるよう努めた。合評では当初“作品と執筆者の実生活が素朴に混同”[8)][p.34]され，“作品の批評は悪口として受け止められてしま”[8)][p.34]うような状態が続いたが，発足して3年が過ぎる頃“お互いの言葉を助言として受け入れられる”[8)][p.35]域に達したという。その頃に創作・合評された詩の校正プロセス[8)][p35-39]を見ると，メンバー達が自分の価値観や経験を一旦脇に置いて作者の表現したいことが何かを考える方法や，仲間からの助言を受けて自分の視点を明確化，相対化する方法を使いこなす様子が伺える。

そして，このような方法を身につけた創作グループのメンバーは，「農家の主婦」や「母親」であることに囚われないまなざしから表現を行うようになる。それを象徴するのが，メンバーが老人ホームへ取材に行き，自分達がこうありたいという老後の姿を登場人物に託して書いたという合作「紫苑寮の人々」[13)]であろう。そこに描かれているのは家庭で肉親に見守られながら生きる（死ぬ）ことを拒否し，自分らしくあれる場としての老人ホーム（この老人ホームのあり方も仔細に設定されている）に入居することを選ぶ「自立した」女性の姿なのである。

5　「自立のための読書」と「母親としての読書」の関係性

だが，創作グループは発足から8年後（「紫苑寮の人々」が著される1年前）の1971年，母親文庫から独立する。創作グループ側に独立の意思はなかったが，上田市PTA母親文庫運営委員会の“創作グループがある為に母親文庫の会員が減る。”[p.218]との声に，やむを得ず文庫と切り離した同好者の集まりとなったのだという[14)]。

このことについては，平野も創作グループメンバーも多くを語らない。しかし，創作グループが独立した時期は長野県PTA母親文庫の活動の中心が母親自身の読書から子供への読書推進へと変遷した[15)]時期と重なっている。そして，「母親らしい」読書活動が母親文庫のなすべき活動として理由づけられる際のロジックに着目すると，そのロジックが「自立のための読書」を追及することとは相容れないものだったことが分かる。

例えば，母親文庫と連携して子供への読書推進をはかる小学校教師は，母親を子供に必要な本を与えるについて教師以上の適者と称する一方，“子ども不在の母親文庫運動”[p.15]を批判する[16)]。ここにおいて母親の位置づけは「時代に遅れがち」「自己の経験に埋没しがち」で読書を通して変化することが必要な存在から子供の教育に欠かせない人へと変わっている。そして，この位置づけの変化は母親文庫活動を母親のあり方自体を問うていく活動から母親であることを前提に行う活動へと変化させた。この流れの中で，創作グループは独立を余儀なくされたのである。

6　本論の知見

これまでの分析を通して本論が提示する知見は以下の通りである。

①’創作グループの助言者である図書館員が，読書会での助言活動で自らの文章解釈を参加者に伝えることに踏み切ったのは，助言の要点を正しい解釈の提供よりも参加者がこれまで持ち得なかった視点から文章を見る機会の提供に置いていたためである。助言者によれば，そうした機会は自己の経験に埋没しがちな人々の自立を促すものであった。助言者はまた，グループのメンバーが互いの助言者となれるようメンバーによる創作・合評活動への支援も積極的に行った。そして，このような活動を通して自分の視点を明確化・相対化し発信する術を身に付けたメンバーは，「母親」や「農家の主婦」であることを相対化した作品を発表するようになっていった。

②’母親文庫から創作グループが独立した頃，母親文庫で共有される母親像は「時代に遅れがち

で教養不足の存在」から「子供の教育に不可欠な存在」へと変化しつつあった。そして，この変化に伴い, 母親文庫の活動の主眼は前者の母親像を乗り越えるべく母親自身が読書することから, 後者の母親像を前提に子供の読書環境を整備することへと遷っていった。このような状況の中で, 自らが読み, 書くことを通して後者の母親像の相対化をも試みる創作グループは母親文庫からの独立を余儀なくされたのである。

注・引用文献

1) 子供達のための母親文庫の詳細は，汐崎順子. 日本の文庫：運営の現状と運営者の意識. Library and Information Science. 2013, vol. 70, p. 25 ‐54.

2) 詳細は，山﨑沙織. 「読めない母親」として集うことの分析：長野県 PTA 母親文庫の 1960 年代から. 社会学評論. 2015, vol. 66-1, p. 105‐121.

3) 長野県 PTA 母親文庫の関連団体で母親の読書に特化した活動を行った他のグループについては，山梨あや. 近代日本における読書と社会教育：図書館を中心とした教育活動の成立と展開. 法政大学出版局，2011，362p.

4) 増田タミ子. “十年の歩み” みんなで歩いて：本と母の会創作グループ 10 周年記念作品集. 本と母の会創作グループ, 1974, p.227-228.

5) 平野勝重. 新しい自覚の芽ばえ：図書館活動の現場から. 朝日ジャーナル. 1972, vol. 14-36, p. 45‐48.

6) 平野勝重. 読むこと書くこと生きること. 北斗社，1966，125p. に掲載された唐沢公子さんの言葉。

7) 平野勝重. 公共図書館の社会教育機能. 図書館雑誌. 1969, vol. 63-1, p. 7-9.

8) 平野勝重. 自立への旅だち：読み，書き，生きる信州の女性たち. 郷土出版社，1981，222p.

9) 平野の思想の核に「自立」があったことは土橋和弘. 平野勝重の言説研究（前川恒雄との論争，「創作グループ」，「社会教育大学」などにみられる図書館活動の思想として）：＜来るべき図書館＞の理論の「自立性（自律性）のために. 信州豊南短期大学紀要. 2015, vol. 32, p. 87-124. によっても指摘されている。

10) 例えば，塩見昇. 学習社会における図書館：図書館の教育機能. 教育学論集. 1991, vol. 20, p. 5-15. は平野の思想を「市民の図書館」の思想と対照的なものと指摘するに留まる。

11) 注 3 の山梨による研究や，篠原由美子. 上田市立図書館における PTA 母親文庫創作グループ. 図書館界. 2007, vol. 59-2, p. 146‐153.

12) 平野勝重. 読書会における図書館員の助言とは何か. 月刊社会教育. 1969, vol. 13-9, p. 94-97.

13) 大久保かつ・唐沢公子・藤沢敏子・宮下康子. “紫苑寮の人々”. 集団創作作品集：老いて生きる日々. 本と母の会創作グループ. 1972, p3-39.

14) 竜野静子. “創作グループ十年の歩み”. みんなで歩いて：本と母の会創作グループ 10 周年記念作品集. 本と母の会創作グループ,1974, p.217-219.

15) 上田市 PTA 母親文庫でも，「創作グループ」が独立した翌年の文集（上田市・小県郡 PTA 母親文庫運営委員会編. つむぎ創刊号. 1972, 105p）の巻頭に親子で同じ本を読んだ体験談が載せられ，その数年後の調査（上田市・小県郡 PTA 母親文庫運営委員会. “上小 PTA 母親文庫実態調査報告” つむぎ 4 号. 1975, p129-132.）では子供の通う学校との連携を深めたいという声が多く出されている。

16) 小口明. “子どもの本と母親文庫活動”. すわ 9 号. 諏訪市 PTA 母親文庫運営委員会, 1970, p.14-15.